

平成21年度上越教育大学学校教育実践研究センター客員研究員報告書

世界史学習の進め方

—地域から考える世界史—

上越教育大学学校教育実践研究センター 客員研究員

(上越教育大学 名誉教授)

二 谷 貞 夫

平成22年3月

世界史学習の進め方

—地域から考える世界史—

上越教育大学学校教育実践研究センター客員研究員
二谷 貞夫 (上越教育大学名誉教授)

要 旨

高校世界史が60年目を迎えた昨年、未履修問題もあって、現状と課題をめぐって論議の機会も多くもたれたが、新しい知見の展開はなかった。注目すべきは新学習指導要領高校世界史であった。そこで、本稿では、新学習指導要領の世界史像の位置づけと実践の方法として、地域から考える世界史を世界史感覚・世界史意識を形成するとともに新しい世界史像形成にむけて提案する内容を示した。

キーワード

世界史像の自主的形成 地域から考える世界史 歴史意識 歴史感覚
世界史構成 グローバル・ヒストリー

1：60年目の世界史教育の現状と学習指導要領の世界史構成

2009(平成21)年は、戦後1949(昭和24)年新制高等学校に科目「世界史」が設置され、教育実践も継続して、60年目の節目に当たる。近年、2007年には、必修科目「世界史」未履修問題が起こって、急速に進行する国際化、激変するグローバル化の中で、改めて日本人・日本国民の世界史認識、世界史意識、あるいは世界感覚の遅れというか未熟さというか世界からズレが問われた。この事に関して、前年度の本研究報告書においても、「世界史学習の視点—シルクロードと世界史—」を実践研究経験から的一端を報告した¹が、抱える課題の多さに慄きながら、世界史教育が取り組むべき課題について、報告しておきたい。60年目を迎えた世界史教育に対して、歴史学研究会は2009年度研究大会で特設部会を設けて「社会科世界史60年」を報告討議した。参加することはなかったが、諸報告と討議要旨を読んで、²その率直な感想を書いたので、本稿執筆に当たって序としておきたい。

歴研大会報告号特設部会社会科世界史60年を読んで—何も変わっていない—

茨木・小川・南塚三報告と討論要旨を読んで、最初に思ったのは、何も新しいことはない。或はなにも変わっていないという印象を持ったことだ。歴研としては、初めての試みだから、新鮮であったかもしれない。しかし、少なくとも世界史教育に関わってきたものにとっては、これまで行なわれた振り返りと全くと言ってよいほどに変わっていない。受験のことといい、授業のことといい、学習指導要領内での世界史学習についての議論でしかない。なるほど、報告は、精緻・詳細であるが、内容はこれまで行なわれた世界史教育50年の振り返り等とどこが違うのだろうか。救いは、小川氏が高校世界史改革論を提示しようとしたことだ。しかし、それでも、決して受験の枠外に飛び出し、現実の世界の動きに立ち向かって世界を動かす学習をするものではない。この残された記録をどう考えればよいのだろうか。無駄とは謂わないが、八ツ場ダム問題に立ち向かう世界学習をどうすすめるかと考える材料にならないかと反芻したい。世界史教育60年は日米歴史認識同盟の基盤をつくってきたのであり、土建文明はそうした世界史の野蛮化・地獄化の象徴であることを反省的に思考しなければ、前には進めないのではないだろうか。世界史学習をアカデミックな世界に乗せてみてはじまらないということを証明したのではないか。2009年11月4日記

歴研増刊号を手にして、読んだときの感情の高ぶりであったかもしれない。なぜこれまでの反省が実践で生かされてこなかったのか、と同時に高度経済成長と西欧近代化とのダブった歴史認識に何の反省もなく19世紀的西欧世界史認識=その通史的学習観が是とされてきたことが、「受験のことといい、授業のことといい、学習指導要領内での世界史学習についての議論でしかない。」と言わせてしまったのだと。

学習指導要領内での議論とはどういうことか。日本人の世界史認識が高等学校の科目「世界史」に示された世界史像であり、それがスタンダードということだ。それを支えるのが大学の西洋史や東洋史の研究者が分担執筆しての世界歴史シ

¹上越教育大学実践研究センター研究報告書(平成20年度版)1-17頁

²『歴史学研究』2009, 10増刊号, 182-213頁

リーズものや大学入学試験問題世界史やその受験参考書であって、それが動かざる日本人の「教養としての世界史」ということになる。現在、高校時代の教科書を読む人々が増えて再版され、ベストセラーに近いとも言われている。³ やっとそこまできたのだから、良いではないかという識者もいるかもしれない。しかし、そうだろうか。

今日の世界史学習に関する状況、高等学校世界史未履修問題に対して、次のような意見集約が文部科学省ホームページには、次の資料が提示されている。

中央教育審議会高等学校高等学校地理歴史・公民専門部会（第4期第2回：平成19年9月11日）における主な意見（高等学校地理歴史科科目履修関係等概要）である。

○小・中学校の歴史では、世界史の扱いはない。このため高等学校では世界史を必修とすることが合理的だと説明されている。地理は中学校で少しだけ世界を扱うので、高等学校では必修にはならないということだとすれば、地理の先生は納得しない。

○現状の小・中学校の内容を考えれば、世界史の必修はシステムとしてやむをえない。日本史と世界史が関連していない時代もあり、指導に当たっては工夫が必要。

○高等学校のA科目は多様な生徒が履修できる観点から、B科目は学問の観点からの構成が必要。その際、例えば、地理であれば、A科目の総合性に配慮し、日本史、世界史との関連をA科目で図るなど内容面での関連が必要。

○昨秋の未履修問題は、学校の法令遵守の姿勢の問題ではあるが、世界史を必修とし、日本史、地理のうちの一つを必修としたことの課題が表れたとも考えている。教育課程を組みやすい、教えやすい、学びやすい枠組みを提供することが重要。

○現代的課題は地理だけで扱う必要はない。世界史等も含め総合的に扱うようにすればよい。科目相互の関係を考えることは必要。

○世界史の未履修問題が生じたのは、世界史が忌避される深い根があるためだ。「関連付け」というとますます指導が難しくなり、一層忌避されるのではないか。また、「関連付け」という言葉を使って日本史と地理に配慮をしても、関係者からは満足は得られない。地理と歴史の総合科目を作ってはどうか。

○災害、防災や環境は人間の命に関わる。こうした事項を扱う地理を選択的な扱いとしてよいのか。世界史や日本史の中で地図を学んでも、ハザードマップは読むことはできない。必修は日常の実践的な営みから考えるべきであり、小中学校の内容から機械的に作られてしまうのは不満だ。高等学校部会においても再考されたい。

○世界の中に日本があることを思えば、世界史の必修が問題とは思わない。日本史の教え方が孤立的であることが問題だ。ただ、このことは高校教員の教え方というよりは、大学の学問の在り方の問題であろう。大阪大では東洋史と西洋史をあわせて世界史を作ったが、その中に日本史は入ってこなかった。東洋史、西洋史、日本史を融合できたのは熊本大学だけである。

○未履修問題は、教える内容というよりは、大学入試に問題がある。世界史は主題学習の意識が強すぎる。システム論等の考え方も、初めて世界史を学ぶ生徒には難しいと思う。

○現代社会2単位の中であれもこれも教えるのは不可能である。優先順位を付けて教えているのが現状だ。倫理的内容、生き方を強調するなら、現代社会の2単位は再検討すべき。

有識者による世界史未履修問題が起こった時期に行なわれた議論である。下線は筆者のものだが、ここでも、歴研の特設部会でだされた問題点は出尽くしている。しかし、「ハザードマップが読めない」という発言以外、だれもが現実の世界の動きを捉えて世界史必修の必要性に関しての発言はされていない。「教養としての世界史」＝「大学受験のための世界史」をいかに効率よく学ばせるか程度の問題意識であって、現実の世界・人類の抱える課題を解決するためなどという発想はない。また、教養としての世界史学習方法の解決の方途を見いだしてはいない。未履修問題の解決が根本的には生活実感としての日本人の世界史認識や学問的にも世界史学を構築する方向に向かっているとはいえない。世界史教育を論議する土壌すら垣間見ることができないのである。

新高等学校学習指導要領が2009年3月に文科省サイトにアップされた。その地理歴史編の解説が遅れてやっと、12月25日に解説地理歴史編が登場した。『新学習指導要領地歴科』は、平成25年4月の入学生から年次進行で実施される。1999年告示・2003年実施の現行の高等学校地歴科世界史と対比してみよう。学習指導要領「世界史」は「目標」・「内容」・「内容の取り扱い」で構成されているが、世界史像を端的に示すのは「内容」であり、「世界史A」と「世界史B」のうち、「世界史B」を取り上げる。

³ 『もういちど読む山川世界史』が『もういちど読む山川日本史』とともに出版され、読まれているという。

現行の世界史構成（1999年告示・03年実施） 新学習指導要領の世界史構成（2009年告示・13年実施）

(1) 世界史の扉	(1) 世界史の扉
(ア) 世界史における時間と空間	(ア) 自然環境と人類のかかわり
(イ) 日常生活に見る世界史	(イ) 日本の歴史と世界の歴史のつながり
(ウ) 世界史と日本史のつながり	(ウ) 日常生活にみる世界の歴史
(2) 諸地域世界の形成	(2) 諸地域世界の形成
(ア) 西アジア・地中海世界	(ア) 西アジア世界・地中海世界
(イ) 南アジア世界の形成	(イ) 南アジア世界・東南アジア世界
(ウ) 東アジア・内陸アジア世界の形成	(ウ) 東アジア世界・内陸アジア世界
	(エ) 時間軸からみる諸地域世界
(3) 諸地域世界の交流と再編	(3) 諸地域世界の交流と再編
(ア) イスラーム世界の形成と拡大	(ア) イスラーム世界の形成と拡大
(イ) ヨーロッパ世界の形成と変動	(イ) ヨーロッパ世界の形成と展開
(ウ) 内陸アジアの動向と諸地域世界	(ウ) 内陸アジアの動向と諸地域世界
	(エ) 空間軸からみる諸地域世界
(4) 諸地域世界の結合と変容	(4) 諸地域世界の結合と変容
(ア) アジア諸地域世界の繁栄と成熟	(ア) アジア諸地域世界の繁栄と日本
(イ) ヨーロッパ世界の拡大と大西洋世界	(イ) ヨーロッパ世界の拡大と大西洋世界
(ウ) ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成	(ウ) 産業社会と国民国家の形成
(エ) 世界市場の形成とアジア諸国	(エ) 世界市場の形成と日本
(オ) 帝国主義と世界の変容	(オ) 資料からよみとく歴史の世界
(5) 地球世界の形成	(5) 地球世界の到来
(ア) 二つの大戦と世界	(ア) 帝国主義と世界の変容
(イ) 米ソ冷戦と第三勢力	(イ) 二つの世界大戦と大衆社会の出現
(ウ) 冷戦の終結と地球社会の到来	(ウ) 米ソ冷戦と第三世界
(エ) 国際対立と国際協調	(エ) グローバル化した世界と日本
(オ) 科学技術の発達と現代文明	(オ) 資料を活用して探究する地球世界の課題
(カ) これからの世界と日本	

以上が対象される世界史構成であるが、大項目の変更はなく、中項目における変更と学習方法における項目が新学習指導要領には加わって、世界史学習の主体的あり方が模索されている。

大項目(5)における“形成”→“到来”とともに、(4)の(オ)を(5)の(ア)へ移動させたことは、現代から近未来を省察する意味が大きい。

新学習指導要領の世界史像は、これまでの世界史構成の変遷から見て、どんな位置を占めるであろうか。素直な感想は、これ以上の変更をするなら、根本的な枠組みや理念を哲学・思想をもって改めなければならないだろう。では、枠組みを変遷史でみるとどうなるだろう。

第1段階では、西洋史を主、東洋史を従とした、単線的で東洋・西洋の2つの流れの発展像であった。1955年、60年と2回にわたる改定も基本的には、1951年版と変化はない。人類の誕生、原始社会の発展、文明のおこりから現代までの歴史の流れを、古代・中世・近代と発展するヨーロッパ史＝西洋史を軸として、中国史を中心としたアジア史＝非ヨーロッパ史をいかに系統的に学習しやすく整合させるかという構成であった。⁴第2段階では、複線型展開像で、いわゆる「文化圏」構想の世界史構成である。1970年、78年の2回にわたる学習指導要領の改定で採られた世界史構成の方法であった。⁵第3段階では、第2段階を「関係」概念で修正補強しつつ第1段階の発展像さらに発展させた関係史的、総合的発展像にさせたものと読み込め、総合的統一的理解を可能なものにしつつあると評価できる。それが、現行と新の学習指導要領である。論すべき内容や論点は多々あっても、学習指導要領の変遷を辿れば、「世界史」成立当初のもの比べる

⁴二谷貞夫『世界史教育の研究』（弘生書林、1988）36頁

⁵同上書、37-41頁

⁶伊藤昌太「ロシア・ソヴィエト史を近現代史の中でどう捉えるか」、西洋史研究会編輯（東北大学大学院ヨーロッパ史研究室）『ヨーロッパ近現代史と世界史教育』（公開講演会2001.9.22）10-15頁）学習指導要領における項目構成の変化については、後掲の表1、表2参照。

と、評価できるものになっている。⁶このように「発展」,「展開」,「関係」という概念・理念によって、19世紀の西欧中心世界史像を発展させた「20世紀的欧米先進国市民社会中心世界史像の日本版」と呼ばせてもらうが、その完成と見てよい。つまり、「進歩発展史観」・「類型化史観」そして「関係史観」が総合化されたものといえよう。

この学習指導要領「世界史」が作り出した歴史意識は、真珠湾攻撃をし、「鬼畜英米」を叫び、そして原爆を投下され、打ちのめされたにもかかわらず、欧米を憎まないものである。日米安保同盟による日米協調に寄与してきた世界史認識であることを肝に銘じておくことである。つまり、現代文明の象徴とも言える土建文明は、世界を野蛮化・地獄化してきたのであり、9.11事件を境に露呈したグローバリゼーションの野蛮化・地獄化の現実には、今一度この完成形の世界史像を再検討すべき段階にある。「世界史学習をアカデミックな世界に乗せてみてもはじまらない」と歴研特設部会報告号批判として述べてみたが、学習指導要領世界史の「内容」の変遷には、いわゆる世界史に関する諸研究の成果等による世界史構成も反映していると考えられる。そこで、これまで大学の歴史教育法など社会科教育法等関連授業で「世界史とはなにか」という導入で世界史に関する概説や一般書の目次構成を紹介すると、受講した学生は、世界史構成にはいろいろなものがあり、世界史像が変化するものだと感想をもち、定型の世界史像があつて学んでいけばそこに到達し、世界史を理解したと納得できるものでないことに気付いている。

2：「世界史構成」の考察—大学での世界史学習導入—

今年度行なった「世界史学習の進め方」という講義で示した導入部分を紹介しておきたい。

はじめに

高等学校の世界史未履修問題が起こって、改めて日本人の世界史認識が問われた。戦後60年、高等学校に科目世界史が設置され、世間では、世界史、世界の歴史に関する出版も多く見られ、今日にいたっている。何回も世界史ブームもあったが、二〇世紀末の国際化は、世界史を必修科目にしたにもかかわらず未履修問題が起こったから、深刻だった。しかし、もともと、世界史が受験科目でなかったら、「世界史離れ」は進んでいたはずである。それほど、世界史は嫌われ者であつたし、もともと日本人自身が世界史感覚・世界史意識が高いとはいえないのである。しかし、人類として、人間として存在する限り、どんなに差があつたとしても、世界史感覚、世界史意識は備わっているのが、人間・人類である。それをどのように開花させていくかは、他の教育と同じである。

1. 「世界史とは」問われて

どんな全体像が考えられてきたのだろうか。人類がアフリカで誕生して、全世界に広がった。その人類がどのような歴史を歩んできたのかを各地域・各国ごとにまとめたもの。

研究書・概説書・一般書の事例 その巻立てを見よう。

- | |
|---------------------------------|
| ① 1997年～2000年『岩波講座 世界歴史』全28巻 |
| 第1巻 世界史へのアプローチ |
| 第2巻 オリент世界 — 7世紀 |
| 第3巻 中華の形成と東方世界 — 2世紀 |
| 第4巻 地中海世界と古典文明 前1500年—後4世紀 |
| 第5巻 帝国と支配 古代の遺産 |
| 第6巻 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開 — 15世紀 |
| 第7巻 ヨーロッパの誕生 4—10世紀 |
| 第8巻 ヨーロッパの成長 11—15世紀 |
| 第9巻 中華の分裂と再生 3—13世紀 |
| 第10巻 イスラーム世界の発展 7—16世紀 |
| 第11巻 中央ユーラシアの統合 9—16世紀 |
| 第12巻 遭遇と発見 異文化への視野 |
| 第13巻 東アジア・東南アジア伝統社会の形成 16—18世紀 |
| 第14巻 イスラーム・環インド洋世界 16—18世紀 |
| 第15巻 商人と市場 ネットワークの中の国家 |
| 第16巻 主権国家と啓蒙 16—18世紀 |
| 第17巻 環大西洋革命 18世紀後半—1830年代 |

第18巻	工業化と国民形成	18世紀末－20世紀初
第19巻	移動と移民	地域を結ぶダイナミズム
第20巻	アジアの〈近代〉	19世紀
第21巻	イスラーム世界とアフリカ	18世紀末－20世紀初
第22巻	産業と革新	資本主義の発展と変容
第23巻	アジアとヨーロッパ	1900年代－20年代
第24巻	解放の光と影	1930年代－40年代
第25巻	戦争と平和	未来へのメッセージ
第26巻	経済成長と国際緊張	1950－70年代
第27巻	ポスト冷戦から21世紀	1980年代－
第28巻	普遍と多元	現代文化へむけて

② 1969年～1971年『岩波講座 世界歴史』全30巻

第1巻 (古代1)	古代オリエント世界	地中海世界 I
第2巻 (古代2)	地中海世界 II	
第3巻 (古代3)	地中海世界 III	南アジア世界の形成
第4巻 (古代4)	東アジア世界の形成	I
第5巻 (古代5)	東アジア世界の形成	II
第6巻 (古代6)	東アジア世界の形成	III 内陸アジア世界の形成
第7巻 (中世1)	中世ヨーロッパ世界 I	
第8巻 (中世2)	西アジア世界	
第9巻 (中世3)	内陸アジア世界の展開 I	東アジア世界の展開 I
第10巻 (中世4)	中世ヨーロッパ世界 II	
第11巻 (中世5)	中世ヨーロッパ世界 III	
第12巻 (中世6)	東アジア世界の展開 II	
第13巻 (中世7)	内陸アジア世界の展開 II	南アジア世界の展開
第14巻 (近代1)	近代世界の形成 I	
第15巻 (近代2)	近代世界の形成 II	
第16巻 (近代3)	近代世界の形成 III	
第17巻 (近代4)	近代世界の展開 I	
第18巻 (近代5)	近代世界の展開 II	
第19巻 (近代6)	近代世界の展開 III	
第20巻 (近代7)	近代世界の展開 IV	
第21巻 (近代8)	近代世界の展開 V	
第22巻 (近代9)	帝国主義時代 I	
第23巻 (近代10)	帝国主義時代 II	
第24巻 (現代1)	第一次世界大戦	
第25巻 (現代2)	第一次世界大戦直後	
第26巻 (現代3)	一九二〇年代	
第27巻 (現代4)	世界恐慌期	
第28巻 (現代5)	一九三〇年代	
第29巻 (現代6)	第二次世界大戦	
第30巻 (別巻)	現代歴史学の課題	

コメント：①と②は、同じ岩波書店の講座ものだが、②は、1960年代までの戦後歴史学研究成果を反映して、マルクス主義歴史研究と西欧の歴史学研究方法が駆使された内容である。その表現は、全巻が、古代・中世・近代と時代区分をして、発展段階を示す概念を使って、進歩発展の歴史観で貫かれている。二〇世紀末から二一世紀にかけて刊行された①とは、異なっていることは一目瞭然と説明した。②の中世ヨーロッパや近代世界や帝国主義などの歴史用語が①の巻立てに用語として登場しないことに注目したいと述べた。

①は、第1巻 世界史へのアプローチ 第5巻 帝国と支配 古代の遺産 第12巻 遭遇と発見 異文化への視野 第15巻 商人と市場 ネットワークの中の国家 第19巻 移動と移民 地域を結ぶダイナミズム 第22巻 産業と革新 資本主義の発展と変容 第25巻 戦争と平和 未来へのメッセージ 第28巻 普遍と多元 現代文化へむけて に特色がある。世界史を把握するキーワードとして巻立てされたと考えられる。これは、近代西欧国民国家・市民社会の世界史認識を越えて、より広い視点、グローバルな視点から人間集団を多層的に捉えて、世界史を組み立てる試みと読み込んで、各巻においても、切り込み口が設けられているので、世界を通史的叙述が行なわれているわけでない。構造と展開、交通と比較、境域と局所、論点と焦点の四つの項目のうち3つぐらいが取り上げられている。講義では取り上げなかったが、①の25巻が刊行されたとき、月報3（1997年12月）に西嶋定生が「世界史像について」という論考をよせているので、紹介しておきたい。②で編集委員を務めた西嶋は、1956年に刊行された上原専禄監修『高校世界史』を例示しさらに、②の構想された世界史像は次の二点を基軸としたとしている。

「第一は、地球上の諸地域が単一の世界、すなわち汎地球的な近代世界となるのは厳密には十九世紀以降であるということ、第二は、それ以前の地球上には複数の世界が併存しかつ生滅していたということであった。このばあい汎地球的な近代世界が形成される以前の諸世界としては、古代オリエント世界・地中海世界・南アジア世界・東アジア世界・内陸アジア世界・中世ヨーロッパ世界・西アジア世界などの複数の世界が想定された。・・・」で、世界史像を描いている。西嶋は、そのあと、①の内容見本を見る限り、②が示した世界史像にたいして、「新らしき世界史像を定位させて明日へと生きるわれわれの世界観を構築させるものでなければならない、と思われるが、内容見本を見るかぎりでは、どうもそのところがはっきりしていないように、私には思われる。予定では第一巻「世界史へのアプローチ」でそのことが十分に検討されるであろうから、私の思いは杞憂にすぎないかもしれない。」と、①の講座に対して、不満を述べている。このような発言を活用すべきであった。

西嶋は、最後に、「もしここで求められている世界史像が、従来の体系化を求めた世界史像に代って、その反体系性ないしは無体系性を意図するものであるならば、これまた停戦終結以後の現在世界の混沌さの表現として、有意義なものであるかもしれない。なぜならば歴史は現在からのみ書かれるものであり、そしてカオスは神々の故郷であるからである。」と結んでいる。①の岩波講座『世界歴史』と同時期に出版された中央公論新社『世界の歴史』を取り上げた。本来なら、前の中央公論社版『世界の歴史』（1960年刊行開始）も取り上げるべきだった。第一巻は「古代文明の発見」だった。しかし、ここでは、現在、刊行進行形であった講談社『興亡の世界史』との比較で取り上げた。

③中央公論新社『世界の歴史』全30巻（1997—1999年）

1. 人類の起源と古代オリエント
2. 中華文明の誕生
3. 古代インドの文明と社会
4. オリエント世界の発展
5. ギリシアとローマ
6. 隋唐帝国と古代朝鮮
7. 宋と中央ユーラシア
8. イスラーム世界の興隆
9. 大モンゴル時代
10. 西ヨーロッパ世界の形成
11. ビザンツとスラヴ
12. 明清と李朝の時代
13. 東南アジアの伝統と発展
14. ムガル帝国から英領インドへ
15. 成熟のイスラーム社会
16. ルネサンスと地中海
17. ヨーロッパ近世の開花
18. ラテンアメリカ文明の興亡
19. 中華帝国の危機
20. 近代イスラームの挑戦
21. アメリカとフランスの革命
22. 近代ヨーロッパの情熱と苦悩

23. アメリカ合衆国の膨張
24. アフリカの民族と社会
25. アジアと欧米世界
26. 世界大戦と現代文化の開幕
27. 自立へ向かうアジア
28. 第二次世界大戦から米ソ対立へ
29. 冷戦と経済繁栄
30. 新世紀の世界と日本

④ 講談社『興亡の世界史』全21巻 2008年～2009年

00. 人類文明の黎明と暮れ方 青柳正規
01. アレクサンドロスの征服と神話 森谷公俊
02. スキタイと匈奴 遊牧の文明 林 俊雄
03. 通商国家カルタゴ 栗田伸子・佐藤育子
04. 地中海世界とローマ帝国 本村凌二
05. シルクロードと唐帝国 森安孝夫
06. イスラーム帝国のジハード 小杉 泰
07. ケルトの水脈 原 聖
08. イタリア海洋都市の精神 陣内秀信
09. モンゴル帝国と長いその後 杉山正明
10. オスマン帝国500年の平和 林佳世子
11. 東南アジア 多文明世界の発見 石澤良昭
12. インカとスペイン 帝国の交錯 網野徹哉
13. 近代ヨーロッパの覇権 福井憲彦
14. ロシア・ロマノフ王朝の大地 土肥恒之
15. 東インド会社とアジアの海 羽田 正
16. 大英帝国という経験 井野瀬久美江
17. 大清帝国と中華の混迷 平野 聡
18. 大日本・満州帝国の遺産 姜尚中・玄武岩
19. 空の帝国 アメリカの20世紀 生井英考
20. 人類はどこへ行くのか 福井憲彦・杉山正明・大塚柳太郎・応地利明・森本公誠・松田素二・朝尾直弘
青柳正規／陣内秀信／ロナルド・トビ

コメント：この二つのシリーズは、丁度の10年間くらいの間隔で出版されているので、歴史意識がどう違うのかということにも関わってくる。前者③は、冷戦終結をうけてのものであり、後者④は、9.11事件後の刊行である。グローバリゼーションの進行も、前者は、一極化の進行中であり、後者は戦時下で、一極から多極化へと進行している時期である。学生は、後者に、18巻に日本が登場し、20巻が人類でおわっているが、前者は、日本と世界の同時代史で終わっていると指摘した。

そして、現在、進行中の史料集をとりあげた。

⑤ 歴史学研究会編『世界史史料』全12巻 2006年12月～

- 第1巻 古代オリエントと地中海世界
- 第2巻 南アジア・イスラーム世界・アフリカ
- 第3巻 東アジア・内陸アジア・東南アジア I 10世紀まで
- 第4巻 東アジア・内陸アジア・東南アジア II 10-18世紀
- 第5巻 ヨーロッパ世界の成立と膨張 17世紀まで
- 第6巻 ヨーロッパ近代社会の形成から帝国主義へ 18・19世紀
- 第7巻 南北アメリカ 先住民の世界から19世紀まで

- 第8巻 帝国主義と各地の抵抗 I 南アジア・中東・アフリカ
- 第9巻 帝国主義と各地の抵抗 II 東アジア・内陸アジア・東南アジア・オセアニア
- 第10巻 20世紀の世界 I ふたつの世界大戦
- 第11巻 20世紀の世界 II 第2次大戦後 冷戦と開発
- 第12巻 21世紀の世界へ 冷戦の終結・湾岸戦争 日本と世界 16世紀以後

刊行の言葉 より「(前略)～ そのような教育・研究の面での試みは、マルクス主義的な「世界史の法則」を提唱する立場と、文明圏・地域を重視する発想とが相互批判を行いながら、世界史像を作っていく過程であった。国ごとの歴史、地域の歴史をただ集めただけでは世界史たり得ない。ヨーロッパ中心ではない世界史を描きたいという、困難な課題に立ち向かっていたのであった。だがさらに近年には、国民国家批判が行われるようになり、国家の枠には収まらない多様な集団や文化に注意が払われ始め、課題はいっそう重くなった。その上、一九九〇年代には、二〇世紀を左右する存在であったソ連邦が消滅するという、それまでの歴史認識の前提を揺るがす「大変動」が生じた。世界史の理解は新たな模索の段階に入ったと言える。～(後略)」(歴史学研究会『世界史史料』編集委員会代表 西川正雄)

コメント：今日においてもその世界史像の迷走しており、通史的な把握はむずかしい。「世界史は、つねに、認識および評価の具体的経験の主体によって表象され、構想された一つの被造物に他ならない」とはかつて上原専禄が述べたことである。いま史料集として、示された世界史構成は、近代・帝国主義という欧米資本主義のグローバリゼーションと各地の抵抗という構造で迎えた二〇世紀の地球大世界史像が2つの大戦をへて、21世紀の世界を史料であとづける意欲作。世界の民衆・民族そして人類のゆくえはどうなるのだろうか。他方、新学習指導要領が、「地球世界の到来」と大項目に掲げているが、欧米では、グローバル・ヒストリー(全球通史：中国語表現)が登場した。なお、アメリカの世界史教育で『World History The Big Eros』が提案されている。サイト上で参照して欲しい。

⑥ スタブリアノス「グローバル・ヒストリー」

1：先史時代

- 1) 食物採集時代
- 2) 食物生産時代

2：ユーラシア古典文明、西暦500年に向かって

- 3) 最初のユーラシア大陸文明 (BC.3500～BC.1000)
- 4) 古典文明 ユーラシア文明形成 (BC.1000～AD.500)
- 5) ギリシア・ローマ文明
- 6) インド文明
- 7) 中国文明
- 8) 古典文明の終焉

3：ユーラシア大陸の中世文明 500～1500

- 9) 中世文明のユーラシア大陸的展開
- 10) イスラム教の興起
- 11) トルコ・モンゴルの侵略
- 12) 伝統的ビザンチン文明
- 13) 伝統的儒教文明
- 14) 革命的西方文明

4：非ユーラシア世界 1500以前

- 15) アフリカ
- 16) アメリカとオーストラリア
- 17) ヨーロッパ膨張の夜明け

5：1500年以前の諸地域世界

- 18) 西方拡張期のイスラム世界
- 19) 西方拡張期の儒教世界
- 20) 拡張期の西方文明；ルネサンスと宗教改革
- 21) 拡張期の西方文明；経済成長と国家建設

6：新興西方世界 1500—1763年

- 22) 西欧の拡張—イベリア段階, 1500—1600年
- 23) 西欧の拡張—オランダ・フランス・イギリス段階, 1600—1763年
- 24) ロシアのアジアへの拡張
- 25) 地球一体化の開始

7：西方優勢の世界 1763—1914年

- 26) ヨーロッパの科学革命と産業革命
- 27) ヨーロッパの政治革命
- 28) ロシア
- 29) 中東
- 30) インド
- 31) 中国と日本
- 32) アフリカ
- 33) 南北アメリカとイギリス自治領
- 34) ポリネシア
- 35) 地球一体化の強化

8：西方の衰退と成功する世界 1914—現在

- 36) 第1次世界大戦；地球的影響
- 37) 植民地世界における民族主義起義
- 38) 1929年以前のヨーロッパの革命と和解
- 39) 5カ年計画と粛清
- 40) 戦争へ突き進む, 1929—1939年
- 41) 第2次世界大戦；地球的影響
- 42) 諸帝国の終焉
- 43) 大同盟, 冷戦と余波
- 44) 第2次産業革命 地球的影響

コメント：これをどう読むかといえ、スタブリアノスが人類史を意識しながらも、西欧近代市民社会の歴史認識を基礎にした全地球的な世界史の展開を叙述していることには、やはり課題を残していると授業では指摘した。そうした観点で、日本の大学受験参考書のスタンダードであるつぎの書物は、やはり、伝統的枠組みを維持しているといえよう。

⑦ 山川出版社『改訂版 詳説 世界史研究』（2008年）

- 序章 先史の世界
- 第1章 オリентと地中海世界
- 第2章 アジア・アメリカの古代文明
- 第3章 東アジア世界の形成と発展
- 第4章 内陸アジア世界の変遷
- 第5章 イスラーム世界の形成と発展
- 第6章 ヨーロッパ世界の形成と発展
- 第7章 諸地域世界の交流
- 第8章 アジア諸地域の繁栄
- 第9章 近代ヨーロッパの成立
- 第10章 ヨーロッパ主権国家体制の展開
- 第11章 欧米における近代社会の成長
- 第12章 欧米における近代国民国家の発展
- 第13章 アジア諸地域の動揺
- 第14章 帝国主義とアジアの民族運動
- 第15章 二つの世界大戦
- 第16章 冷戦と第三世界の自立
- 第17章 現代の世界

それに対して、上原専禄監修『高校世界史』（1956年）や不合格本となり、一般書として出版された『日本国民の世界史』（岩波書店、1960年）などの現実的課題に即していかに世界史的現実を認識すべきかなどを基調とした方法論をうけついで次の構成を示した。

⑧ 実教出版：教科書「高校世界史」（1977年不合格本）

第1部 前史

- 第1章 東アジア世界
- 第2章 東南アジア世界
- 第3章 南アジア世界
- 第4章 西アジア・北アフリカ世界
- 第5章 ヨーロッパ世界
- 第6章 アフリカ世界
- 第7章 アメリカ世界
- 第8章 太平洋世界
- 第9章 北方ユーラシア世界
- 〈中間主題〉 騎馬民族の社会と文化
イスラム文明とヨーロッパ（7～12世紀）

第2部 本史Ⅰ（1）

- 序章 世界史の一体化のはじまり
- 第1章 東アジア世界
- 第2章 東南アジア世界
- 第3章 南アジア世界
- 第4章 西アジア・北アフリカ世界
- 第5章 ヨーロッパ世界
- 第6章 アフリカ世界
- 第7章 アメリカ世界
- 第8章 太平洋世界
- 第9章 北方ユーラシア世界
- 〈中間主題〉 オスマン・トルコと西ヨーロッパ（15～16世紀）

第3部 本史Ⅰ（2）

- 第1章 ヨーロッパ世界
- 第2章 アメリカ世界
- 第3章 西アジア・北アフリカ世界
- 第4章 アフリカ世界
- 第5章 南アジア世界
- 第6章 東南アジア世界
- 第7章 太平洋世界
- 第8章 北方ユーラシア世界
- 第9章 東アジア世界
- 〈中間主題〉 世界史としての19世紀

第4部 本史Ⅱ

- 第1章 ヨーロッパ世界
- 第2章 アメリカ世界
- 第3章 西アジア・北アフリカ世界
- 第4章 アフリカ世界
- 第5章 南アジア世界
- 第6章 東南アジア世界
- 第7章 太平洋世界
- 第8章 北方ユーラシア世界
- 第9章 東アジア世界

この教科書は、19世紀以降を横割りにすることで、合格本となったが、人類の誕生からオリエントへとといういわゆる19世紀的西欧中心史観の世界史像の改良型の世界史構成とことなり、採用数も少なく、僅かな期間で絶版になったと説明した。東アジアや東洋文明からはじまる世界史学習はなかなか現場では馴染まず、ということは、日本人の世界史像にはある定型＝19世紀的西欧中心史観の世界史像が歴然と存在しており、それを打破して、つまりは「西洋めがね」をはずして、どのような観点で世界の歴史を捉えればよいか改めて問われていることを導入として学習している。

3. 世界史学習の視点―「地域から考える世界史」―

なぜ「地域から考える世界史」なのか。『あたらしい歴史教育6【戦後歴史教育を見直す】』（大月書店、1994年）に「高校世界史学習とその展開」を執筆した際、そのサブタイトルは、「同時代全地域把握」から「地域・日本・世界の一体的把握」へと付したのは、現場の世界史意識がそのような方向を獲ってきたものと認識していたからである。

同時代的全地域的把握の全地域的把握は、全地域であり、全階層的であり、「古代」「中世」と現代の有機的関連、諸地域世界の有機的関係を捉えることをめざしていた。

さらに、日本史と世界史の統一的把握、弱者の世界史、現代認識としての世界史、人類史としての世界史、など実践的な検討がすすみ、「地域・日本・世界の統一的把握」をめざす世界史学習へと展開した。

教育という職分それ自体からの歴史的・政治的状況への認識をぬきにしては、学問の成果も主体的にはこなせないということが、地域から考える世界史の創造となったのである。ナマの問題の教育的な生かし方が求められる。その際、杉原達が「大阪・今里からの世界史」で述べたように、生活や地域を語るとき素朴な実感のみを絶対視したり、ミクロ・ヒストリーに遁走して、全体的・構造的動態の把握を回避する姿勢をとるべきではない。上原専禄の世界史学構築をめざした、13世紀世界史起点論や13地域世界区分論。さらに、吉田悟郎・鈴木亮氏などが世界史教育実践研究であきらかにしてきた世界史論に学びながら、仮説を立てる。第1枠から第4枠と区切って表現してあるが、一つの歴史学習枠のものであり、学習者自身がこうした全体像のなかに主体的に関わっているのが歴史と向き合って学び続ける姿であることを想定したものと理解して欲しい。

第1枠

目的

世界史感覚・世界史意識の形成 ⇔ 自己の中に異質多元的な自己を発見する
【内在(精神)史と外在(文明)史】【歴史と反歴史・非歴史】 交差・融解

第2枠

⇕ ⇕ ⇕ ⇕ ⇕

学習の成果として

世界史像の自主的・形成（日本史と世界史の統一的把握）

目標：学習者がめざすもの

第3枠

⇕ ⇕ ⇕ ⇕ ⇕

学習の作業として

同時代的全地域的把握 ⇔ 地域・日本・世界の統一的把握

第4枠

⇕ ⇕ ⇕ ⇕ ⇕

歴史に立ち向かうために

エピソード層（地域から考える世界史）

授業づくりは、「教材」の選定→「授業方法」の工夫→「教育内容」の設定

（風土、生活、生産、言語、風俗、習慣、宗教、神話、民話、音楽、文学、美術、考え方、思想、政治、経済、社会の全体）

例：ジーンズや紅茶と産業革命、クロワッサンとトルコ、イモとアメリカ、オーデコロンとローマ、ねずみや馬の世界史、ゾウやキリンの渡来、チューリップとオスマン帝国、切手、貨幣、軍票、紙幣、映画、写真、絵画・・・

二宮宏之「歴史的思考の現在」（『岩波講座・社会科学の方法Ⅸ』1993）

示した四つの枠（第1枠から第4枠）は双方向の矢印で示したように4つの枠は全て関連しあっており、世界史を学習

するとは、この四つの枠全てに関わっているということを示している。

あえて言えば、一番下の枠が学校で行われている世界史の授業現場と想定している。いかに歴史に立ち向かうために創意工夫を凝らして、授業をつくっているか。教師と生徒の共同作業になればだが、教師の独り相撲となるかもしれない。近年まとめられた小田中直樹氏の報告（2007年）⁷は、この第4枠にあたり、教師の悪戦苦闘の様子がよく分かる。そして、その良心的な教師たちは第3枠から第1枠を目指しているし、生徒たちも同様なはずである。

第1枠は、世界史学習・世界史教育がめざす目的であり、第1枠から第4枠へと下降し、そして、上昇してくることが日常的に行なわれていると仮説を立てている。しかし、それも世界史教育・世界史学習の成果・結果であると考えたい。世界史感覚・世界史意識の形成とは、根本においては、歴史感覚・歴史意識の形成に根ざすものであり、同義と言っても良い。もともと人間が歴史的存在であることを自覚するということがむずかしい。第1枠内の内在史は精神としてあるが、外在史＝文明史は客体であり、それを内在化することで、歴史意識(世界史感覚・世界史意識)をつくるのであり、また、歴史と反歴史との交差が学習者自身の内在史になるので、当然葛藤がある。⁸

第2枠に関わって、自主的な世界史像の形成について、前年度のこのセンター報告でも取り上げたので参照して欲しいが、学習者自身が歴史叙述を試みる作業は、繰り返し行なわれる必要がある。⁹

この「世界史像の自主的形成」は上原専禄が1950年代に使用した用語だが、「戦後の国民的実践課題にまさしく対応し、その克服を志向する重く、深く、緊要な歴史学的・社会科学研究課題の基本的な方法および総合的目標として、筆者が選定したものに他ならない」し、「国民に対して新しい世界史像を与えるのだというようなたかぶった気持ではなく、国民とともに模索しながら新しい世界史像の一つの見本として試作するのだ」¹⁰とこの言葉のもつ意味を語っているが、世界史学習のあり方そのものであり、世界史像の自主的形成を学習者自身が試みる作業をすることと解釈しておきたい。教科書が示している世界史像も一つのサンプルであり、それを是として暗記するものではないのである。

括弧して日本史と世界史の統一的把握と記してあるが、これも、上原専禄が提起した世界史学習である。次の発言が重要である。「世界史と日本史を歴史教育の面で、統一的にどう扱えばよいのかという問題の答えは、実は歴史家や歴史の研究者だけでは処置できないのであって、非常に大きいことをいうことになりますが、日本の国民というものが、どのような歴史意識、歴史感覚を今までもっていたか、これからどんな新しい歴史意識、歴史感覚がおおぜいの国民の間に形成されて行くだろうかということに関連させなければ、結局処置できないほどの、非常にスケールの大きい問題だと考えるのであります。」また、日本史と世界史との統一的把握については、日本史と世界史の連関を単純に結びつけるように考えるのではなく、「研究上・教育上、便宜のために世界史と日本史とにわけたり、世界史をさらにいろんな民族史、地域史にわけたりするのは、研究上・教育上の都合でどうやってもいいのですけれども、私たちの意識のなかでは、日本史と世界史とを区別する理由がだんだんなくなっていくのではないかと思うのであります。結局、世界史というものを、なにか、日本史というものをその中に含むかもしれないが、日本史を超越したものとしてなにかに関する研究であり、教科であるというふうを考えてきたところから、世界史と日本史とをどう結びつけるかという問題がおこるのであって、日本史の現実をつきつめていき、掘り上げていけば、日本史的現実に密着して当然考慮しなければならないだけの世界史的現実というものが、視野のなかに入ってくるのではないか。～日本史的現実を掘り下げていくと世界史的現実にぶつかっていく、それを研究のなかで消化し、教育の面で消化していくということではいいのではないか、そういうぐあいに考えられはしないかと思うのであります。」と述べている。¹¹

第3枠は、作業として行なうのだが、前掲書『あたらしい歴史教育6【戦後歴史教育を見直す】』（大月書店、1994年）で整理をしたので、参照して欲しい。「同時代的全地域的把握」とは、例えば、8世紀のユーラシア世界を描いてみる。コンスタンチノポリス、バグダード、長安、平城京をつないでユーラシア大陸を鳥瞰してみる。あるいは、13世紀後半のバックスタターリカをモノ・人・情報などの移動を含めて描いてみる。また、「地域・日本・世界の統一的把握」、同様な方向で、日本列島内のある地域から、自分の学習している地域から日本・世界へと押し広げていく。そうした作業を繰り返していく。歴史地図を学習者自身が描いていく作業である。

第4枠で、強調したいのは、地域から考える世界史である。

事例として、筆者の経験から取り上げよう。2004年3月、上越大学を退職後、長野県茅野市の住人となり、安曇野・松

⁷小田中直樹『世界史の教室から』（山川出版社）

⁸拙論「歴史像の形成と社会科」（教員養成大学・学部教官研究集会社会科部会編『社会科教育の理論と実践』東洋館出版社、1988年）

⁹産業革命期の世界史を描写したものだが、1例として参照して欲しい。

¹⁰『上原専禄著作集8』207-208ページ

¹¹「世界史と日本史との統一的把握の問題」は1957年11月の講演で、『上原専禄著作集12』（150-166頁）に所収。下線部は引用者。

本平・諏訪地域を散策するようになった。寺社・史跡や博物館、などを見て回るようになる。

① 第二次世界大戦と諏訪鉄山

諏訪鉄山の掘り起こしに学ぶ 茅野駅前の機関車C12が展示されている。

1945（昭和20）年、日本鋼管が軍部の本土決戦、軍需省の期待で、明治地区・石安地区・糸萱地区で、273,960トン、徴用工として、朝鮮半島から200名が昭和18年から徴用されていた。（1639名が総労務者数）期待されたのは、含有率45%の鉄鉱石と露天掘り。立命館大学生や諏訪中学など勤労奉仕隊として働く。

1945年6月4日連合軍捕虜242名が到着。蓼科捕虜収容所（東京俘虜収容所第6分所）アメリカ、イギリス、オランダ、カナダ、オーストラリア、支那、（士官8、非軍人28名、ドクター2名、チェコの非軍人1名？）強制労働、地元民との接触・食糧不足、戦後の慰問物資投下と地元民

その後のこと：引揚げ時、笹子駅での列車事故の負傷者への奉仕（1945年9月2日）

偲ぶ会（1955年6月、元捕虜も参加）

以上のような、諸事実の掘り起こしは、そのこと自体が、第二次世界大戦の学習であり、いわゆる教科書風の学習に終わらせないものとなる。

② 二人のよし子と日中戦争

清朝の肅親王の娘（金壁輝）が松本平で成長した川島芳子。松本の城山公園下の寺に川島浪速の墓に眠る芳子。鳥立の博物館に川島芳子に関する展示室がある。

男装の麗人としてもはやされたが、北京・上海・満州国で活躍。漢奸として処刑された。実は生きていたとも話題になった。以下参考文献を挙げる。

川島芳子記念室設立実行委員会発行・穂刈甲子男編著『真実の川島芳子』

『川島芳子獄中記』

園本琴音『孤独の王女 川島芳子』 智書房 2004年刊

原田伴彦「川島芳子をめぐってー 異国の佳人・断想」

（『原田伴彦著作集6 人物史夜話』、思文閣出版、1982年）

寺尾紗穂『評伝 川島芳子ー男装のエトランゼ』文春新書2008年

倉科 平 宮浦真之助 画『川島浪速』（川島芳子記念室運営委員会）

他方、山口淑子は、李香蘭として満映のスターとして国策映画で活躍。日本でも日中双方でもはやされた。戦後漢奸として裁かれるが、処刑は免れ、帰国。山口淑子として映画界にカンバック。越境の彫刻家イサムノグチと結婚。離婚後、国会議員として日中交流親善に活躍。

二人のよし子は、日中戦争において両国にまたがって生きてきた。以下参考文献である。

藤原作弥『山口淑子ー李香蘭 私の半生』1987年 講談社

山口淑子『「李香蘭」を生きて』2004年 日本経済新聞社

四方田犬彦編『李香蘭と東アジア』2001年 東大出版会

地域に生きた川島芳子に対して山口淑子は同時代を生きてきたが、境遇が似ていることを比較しながら、日中戦争を学習することになる。また、戦後のなかで、どう扱われてきたかも学習し、歴史が過去のものでないことが実感させられる。

③ 河原操子と「近代日本とアジア」（後掲報告参照）

2004年11月、美咲 蘭という朗読家・脚本家の新聞記事で、11月に松本市芸術文化祭で「彩虹、蒼き天に・・・」という脚本で上演。松本藩の儒学者の家に生まれ、中国とモンゴルのカラチン王国で女子教育に尽力した河原操子の名を知る。松本市博物館の郷土の偉人として、川島芳子とともに展示されていた。

④ 碌山美術館を訪ねて

HPより：日本の近代彫刻の扉を開いた萩原守衛（碌山）の作品と資料を永久に保存し、一般に公開するために、昭和33年4月、29万9100余人の力によって、碌山の生地である北アルプスの麓・安曇野の真中に誕生いたしました。また碌山と関係の深い優れた一群の芸術家たちの作品を併せて蒐集保存し、日本近代彫刻の流れと展開を明らかにしようと努めております。

女という彫像から 相馬黒光 — 新宿中村屋のインドカーリー

— ビハーリー・ポーズ

中村岳志『中村屋のポーズーインド独立運動と近代日本のアジア主義』（白水社、2005年）



1910年の作。重要文化財 礫山の死後、良は、アトリエに行って今度は「女」を凝視し、「もがくようなその表情」が「女性の悩みを象徴して」いると感じる。『黙移』32歳で生涯をとじた守衛（礫山）の最後の作品。

テーマとして、礫山とロダン

⑤ 国宝縄文のビーナスから広がる縄文人の世界は、アフリカを出た新人の世界につながる。

茅野市棚畑遺跡出土の高さ27cmの土偶 に続いて茅野市中原遺跡出土の仮面の女神と名付けられた土偶。1万年前～8千年前が縄文時代確立期：中部山岳地域の森の文化縄文はムラとムラを結ぶネットワークができた。黒曜石の文化圏のひろがりともみることができる。雑木林にかこまれた生活環境。縄文中期の発展がビーナス。尖石博物館



全ての現代人は、約16万年前、アフリカで生活していた女性（ミトコンドリア・イブ）を共通の祖先とする。出アフリカ後、約10万年前には、中近東。7万年～5万年前にはアジア、オーストラリア、4万年前にはヨーロッパ、1万4000年～1万2000年前には、アメリカ大陸、数千年前には南太平洋の島々へ移動した。こうして、1500年前にはほぼ人類の移動は終わる。

日本人の母になる女性は16人と明らかになってきた。ミトコンドリアDNAから解明された。

篠田謙一『日本人になった祖先たち』（NHKブックス、2007年）によれば、

- * 東アジアの最大集団は、Dのグループで、朝鮮半島や中国東北部に広がるD4…32.61% 中国南部を中心としたD5…4.8%
- * 7人に1人が該当する「環太平洋に広がる移住の波」Aのグループ A 6.85%
- * 日本の基層集団を生む系統M7 M7a (7.47%) は主として日本、M7b (4.45%) は大陸沿岸から中国南部地域、M7c (0.76%) 東南アジアの島嶼部
M7が生じたのが4万年前、各サブグループが生じたのが2万5000年前で、中央アジアから北東アジアに殆ど分布していないことから、この時代には、地球の寒冷化によって、極地方には大量の水が集積して、海水面は低下して黄海から東シナ海にかけては広大な陸地が出現。おそらくM7の起源地は今は海底。そこで生まれたグループM7aは、琉球列島を伝わって日本に入ってきた。本土の約7%だが、沖縄は4人に1人が持っている。M8a-1.22%, M10-1.3%
- * マンモスハンターの系譜 A-6.85% 中央アジアから北アジアに限られる。旧石器時代のシベリアのマンモスハンターと呼ばれる優秀な狩猟民 A4は東アジア各地にひらがる。A5は朝鮮半島から縄文以降に入ったが、渡来系弥生人との関連は薄い。
- * 北方に特化するGグループ-6.86%
- * 東南アジアの最大集団 Fグループ-5.34%

- * 北方ルートの末裔たち N9 グループ N9a-4.57% N9b-2.13%
- * 北方漢民族との結びつき M8a グループ 1.22%
- * 中央アジアの平原に分布を広げる Cグループ
- * 北方アジアにつながる系譜 M10 グループ 縄文人に多いミトコンドリアDNA プリヤート人
- * アジアとヨーロッパを結ぶ人びと Zグループ 極北地域の集団にみる 非常にユニークなもの
- * 日本のなかのヨーロッパ人の系統 HVグループ

ここまで、縄文学習が世界史学習へ広がっていく。その学習の導入となる諏訪の考古学者—鳥居龍藏の下で、岡谷出身の八幡一郎、茅野市の宮坂英式（尖石考古館初代館長）、「縄文農耕論」を主張した藤森栄一—戦後派の三人は、武藤雄六、宮坂光昭、戸沢充則 がいる。

4：無尽蔵に掘って行く地域の歴史とそのひろがり

諏訪の片倉館から製糸業と世界、岩波茂雄と永田鉄山、諏訪湖の釜口とパナマ運河。また、二・四事件（「長野教員赤化事件」）と世界恐慌など地域はその歴史から日本史へ、さらに、「地域から考える世界史」から「地域で創る世界史」「地域で世界を見つめ、意識・認識する」へと深まっていく。学校で、通史学習が行われるが、必ずしも、通史による世界史学習や日本史学習が歴史認識を深め、歴史意識をつくるものではなく、むしろ、疎外しているかもしれない。

歴史とは、空間的なものが時間的なものよりさきにあって、はじめて成立する。過去にさかのぼるよりまえに現在の空間的なひろがりがある、そこでのさまざまな体験の連なり、ひろがりから歴史ははじまる。

（河原操子に関する報告）

国際理解教育学会岐阜大会（2006年6月10～11日）

テーマ 20世紀初頭の日中交流の一こま ～河原操子の活動～

A study about the scene of interchange with Japan and China in the beginning of the 20th century the instructional activity of Misako Kawahara

二谷貞夫（元上越教育大学）

河原操子（1875～1945）、教育者。1903年、内モンゴル・カラチンに女子教育の学校を創設し、2ヵ年だが、献身的な教育活動を行った。1905年帰国する。その後、1906年、一宮鈴太郎と結婚、渡米。1909年、『蒙古土産』を実業之日本社より刊行256p。1921年帰国。1935年、福島貞子著『日露戦争秘史中の河原操子』が婦女新聞社から発行216p。一宮操子として序。旅日記64pを付す。1944年、『新版蒙古土産』が大阪の靖文社より刊行313p。1945年、熱海にて71歳の生涯をとじる。

1. はじめに

研究を始める動機は、松本城に隣接する松本市立博物館を見学した際、郷土の偉人として、川島芳子とともに河原操子の写真が展示されていた。なぜ長野県松本平に日露戦争をはさんだ時期にモンゴルまで出かけて、女子教育に力を注いだ女性がいたのかというきわめて素朴な疑問を抱いたからである。しかも「男装の麗人」として知られる川島芳子と一緒に写真が並べてあったことも驚いた。この松本平で育った2人の女性が、近代の日中交流に活躍したのはどういうことなのか。一人は、清朝末期の肅親王第14王女愛新覚羅顕し、中国名金璧輝、川島浪速の養女となった川島芳子である。日中戦争に深く係り、時代に翻弄され、漢奸として銃殺された。松本市城山公園の川島浪速の墓に名が刻まれている。また、日本刑法博物館（松本市島立）には、川島芳子記念室があり、関係資料がてじされている。河原操子も関連する展示がある。なぜ、いま顕彰されているのか興味はつきない。

問題意識と研究目的としては、近代化する東アジア世界の中で、国境を跨いで生きる個人、ここでは特に女性がどう「国際人」としてどう生きたかを明らかにしたい。これは、最終目的であり、当面は、「日露開戦直前、ロシアの情報を集める特命を担っていたとされ、長く忘れ去られた存在だった」河原操子にスポットを当てて、国際交流における国家政策・政治動向・個人の生きかたを時代と東アジア世界のなかでとらえかえしてみたい。

2. 河原操子の中国・モンゴル認識—『蒙古土産』の構成と内容（新版『蒙古土産』）

序編（入蒙当時の回顧，1. 運命の手，2. 喀喇沁王室の優遇，3. 表裏両面の事業，4. 烈士伊藤吉原両氏，5. 特別任務第一班）

本編 第1章清国の女子教育と我，第2章上海務本女学堂，第3章^{ウーベン}南海小観，第4章南京行，第5章北京行，第6章喀喇沁行，第7章喀喇沁雜記，第8章毓正女学堂，第9章雪中梅，第10章帰朝日記，余録 喀喇沁王の御手簡，教え子達の手紙など書簡類

3. 河原操子とその著『蒙古土産』の捉えかた

近年の先行研究のひとつに、岩橋邦枝「河原操子—密命を帯びた若き女教師が秘境にうちたてた教育の理想像」（『人物近代女性史7 明治女性の知的情熱』1981年，講談社刊）がある。河原操子には“日中親善の志”が時代の中で培われ、28歳でカラチン王府に女学校を創設し、女子教育の道を拓き、裏面で軍事機密にかかわる極秘の役目を負うにはそれだけの素地があった。育った時代環境と教育の賜物としての国際感覚が備わっていたと考えられる。一宮操子著『蒙古土産』（1909年刊）が繰り返し出版された。1944年新版が大阪の靖文社から出版された。戦後では、書名をかえた『カラチン王妃と私：モンゴル民族の心に生きた女性教師』芙蓉書房、1969年刊があり、『新版蒙古土産』が50年後1994年に東京のゆまに書房から『シリーズにつぼん記明治の冒険者たち、第13巻』として複製・発行された。もう一つ、考慮したいのは、河原操子の伝記が、友人福島貞子著『日露戦争秘史中の河原操子』婦女新聞社が1935（昭和10）年に刊行されていることである。

◎初版『蒙古土産』が出版された1909年は、10月に伊藤博文がハルピン駅頭で安重根に射殺された年である。当時の日本のアジア外交は、日英同盟を基調とした「小村外交」*であり、ロシアが満州、日本が韓国をとという伊藤博文の交換論には反対であった。

◎1935年に伝記が出版されているが、満州国皇帝溥儀が来日した年であり、一方で天皇機関説、他方では国体明徴の訓令があった。軍部では統制派永田鉄山が皇道派相沢中佐に斬殺された。また、中国では、チャハル¹²事件が起き、関東軍が河北省やチャハル省北中部へ勢力を拡大する時期であり、国民政府軍との緊張関係は高まるばかりであった。

◎1944年 敗戦濃厚。対ソ交渉も捗らず。学童疎開はじまる。1939年に内蒙古に成立した蒙古連合自治政府が張家口で日本の傀儡政権となつて、4万近い日本人が活躍していた。

信濃田翁「再刊に際して追記」に言う「本書を読まれる若い婦人方は、本書の著者が四十年前に北方蒙古で活躍された元氣と愛国心を、今日国内及び南方に於て發揮し、日本婦人がいかに強いかを、世界に示されんことを希望する。」

◎1969年 安田講堂封鎖事件。沖縄返還交渉はじまる。中ソ国境紛争・武力衝突。

◎1994年 「従軍慰安婦」問題，細川内閣・羽田内閣・村山内閣，松本サリン事件
小中学校「日の丸」掲揚率95%を超える。

◎2004年11月，美咲蘭が河原操子を主人公とした脚本「彩虹，蒼き天に…」を書き，松本市芸術文化祭で上演される。

4. まとめにかえて

①近代公教育を内モンゴルにもたらす。

②信濃海外協会などを通じて満州移民を積極的に推進した永田稔の言葉「一番先きに日本のスパイが渡った。次ぎに鉄砲をかついだ兵隊が渡った。而して算盤を握った商人が渡った。其間に極めて少数の鋤をかついだ農民が渡った」（加納実紀代「満州と女たち」¹³より）

*英米への従属と対立という矛盾を内包して，韓国併合と第2次条約改正で，国権の完全回復と同時にアジア諸民族への抑圧を明示した。日本帝国主義成立期の外交といえよう。

¹²チャハル＝察哈爾，元内蒙古の部族名。清末，漢人の入植多く，民国に入り，左翼4旗がチャハル省，右翼4旗が綏遠省に分属。チャハルの省都は張家口。1952年，内蒙古，河北省，山西省に分属・解消。

¹³岩波講座近代日本と植民地5 膨張する帝国の人脈』202p.

〈表1〉 学習指導要領の変遷（世界史）

告示等の時期	施行の時期	告示等の区分	科目名	単位数	備 考
昭和22 1947	昭和24 1949	試案	東洋史 西洋史	5 5	「一般社会」を含めて2科目以上必修 (10～25)
昭和26 1951	昭和27 1952	試案 改訂	世界史	5	「一般社会」を含めて2科目以上必修 (10～25)
昭和30 1955	昭和31 1956	改訂	社会科 世界史	3～5	「社会」を含めて3科目以上必修 (9～20)
昭和35 1960	昭和38 1963	告示	世界史A 世界史B	3 4	「倫社・政経」を含めて4科目以上 (10～15), 初の告示, 「要領」が法的 拘束力をもつ
昭和45 1970	昭和48 1973	告示	世界史	3	「倫社・政経」を含めて4科目以上 (10～15)
昭和53 1978	昭和57 1982	告示	世界史	4	「現代社会」(新設必修)を含めて1 科目以上(4～20)
平成元 1989	平成6 1994	告示	世界史A 世界史B	2 4	「社会科」の解体 標準単位となる。世界史A, Bのいづ れか1科目必修となる
平成11 1999	平成15 2003	告示	世界史A 世界史B	2 4	標準単位数。世界史A, Bのいづれか 1科目必修
平成21 2009	平成25 2013	告示	世界史A 世界史B	2 4	標準単位数。世界史A, Bのいづれか 1科目必修

〈表2〉世界史（B）の「内容」（大項目と中項目）

1970（昭和45）年告示 1973（昭和48）年施行	1978（昭和53）年告示 1982（昭和57）年施行
<p style="text-align: center;">世界史（3単位）</p> <p>(1) 古代文化の成立 オリエン特文化の成立 地中海文化の成立 インド文化、イラン文化の成立 中国文化の成立</p> <p>(2) 東アジア文化圏の形成と発展 北アジア諸民族の活動 中国の社会と文化の変遷</p> <p>(3) 西アジア文化圏の形成と文化の交流 イスラム世界の形成とイスラム文化 東西文化の交流</p> <p>(4) ヨーロッパ文化圏の形成と発展 西ヨーロッパ封建社会とカトリック教会 東ヨーロッパの社会と文化</p> <p>(5) ヨーロッパ市民社会の成立と発展 近代ヨーロッパの誕生 ヨーロッパ世界の拡大 市民革命と市民社会の成立 産業革命と資本主義経済の発達 自由主義・国民主義と社会主義運動 ヨーロッパ近代文化の発展</p> <p>(6) アジアの専制国家とヨーロッパ勢力の進出 アジア専制国家の盛衰 ヨーロッパ勢力の進出と世界の分割 アジア諸国の動向と日本の近代化</p> <p>(7) 現代世界の成立と展開 第一次世界大戦とアメリカ合衆国の発展 ロシア革命と社会主義運動の推移 世界恐慌と全体主義の台頭 第二次世界大戦</p> <p>(8) 今日の世界と日本 国際連合の成立と冷たい戦争 アジア、アフリカ諸民族の独立と国家建設 国際情勢の推移と日本</p>	<p style="text-align: center;">世界史（4単位）</p> <p>(1) 文明のおこり オリエン特文明、イラン文明の成立 地中海文明の成立 インド文明の成立 中国文明の成立</p> <p>(2) 東アジア文化圏の形成と発展 遊牧民族の活動と中国の社会・文化 中国の社会と文化の変遷と隣接諸民族の発展 中華帝国の繁栄</p> <p>(3) 西アジア文化圏の形成と発展 イスラム世界の形成 インド・東南アジアとイスラム世界の拡大 イスラム文化と東西文化の交流</p> <p>(4) ヨーロッパ文化圏の形成と発展 ヨーロッパ社会と文化の形成 ヨーロッパ社会と文化の変動 国民国家の形成と国際関係</p> <p>(5) 19世紀の世界 ヨーロッパ市民社会の成立とその文化 産業革命の進展とアジア ヨーロッパ諸革命とアメリカ大陸 帝国主義とアジア、アフリカ 現代世界の成立と展開</p> <p>(6) 両大戦間の世界 第一次世界大戦とソビエト連邦の成立 戦後のヨーロッパとアジア、アフリカの民族運動 今日の世界と日本 アメリカ合衆国の動向と世界恐慌 全体主義の台頭と第二次世界大戦</p> <p>(7) 今日の世界と日本 第二次大戦後の国際社会 国際情勢の推移と日本 科学技術の発達と人類文化</p>

1989 (平成元) 年告示 1994 (平成6) 年施行	1999 (平成11) 年告示 2003 (平成15) 年施行予定
<p style="text-align: center;">世界史B (4単位)</p> <p>(1) 文明の起こり ア オリエント文明 イ 地中海文明 ウ インド文明 エ 中国文明</p> <p>(2) 東アジア文化圏の形成と発展 ア 遊牧民族の活動と東アジア世界の形成 イ 中国社会の変遷と隣接諸民族の活動 ウ 中華帝国の繁栄と朝鮮, 日本</p> <p>(3) 西アジア・南アジアの文化圏と東西交流 ア イスラム世界の形成 イ イスラム世界の発展 ウ 南アジア・東南アジア世界の展開 エ ユーラシアの東西交流</p> <p>(4) ヨーロッパ文化圏の形成と発展 ア 東西ヨーロッパ世界の形成 イ ヨーロッパの変革と大航海時代 ウ 17・18世紀のヨーロッパと世界</p> <p>(5) 近代と世界の変容 ア 市民革命と産業革命 イ アメリカ合衆国とアメリカ文明 ウ 帝国主義とアジア・アフリカ</p> <p>(6) 20世紀の世界 ア 二つの大戦と世界 イ ソビエト連邦と社会主義諸国 ウ アメリカ合衆国と自由主義諸国 エ アジア・アフリカ諸国の民族運動と独立</p> <p>(7) 現代の課題 ア 国際対立と国際協調 イ 科学技術の発展と現代文明 ウ これからの世界と日本</p>	<p style="text-align: center;">世界史B (4単位)</p> <p>(1) 世界史への扉 ア 世界史における時間と空間 イ 日常生活に見る世界史 ウ 世界史と日本史とのつながり</p> <p>(2) 諸地域世界の形成 ア 西アジア・地中海世界 イ 南アジア世界の形成 ウ 東アジア・内陸アジア世界の形成</p> <p>(3) 諸地域世界の交流と再編 ア イスラム世界の形成と拡大 イ ヨーロッパ世界の形成と変動 ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界</p> <p>(4) 諸地域世界の結合と変容 ア アジア諸地域世界の繁栄と成熟 イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界 ウ ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成 エ 世界市場の形成とアジア諸国 オ 帝国主義と世界の変容</p> <p>(5) 地球世界の形成 ア 二つの大戦と世界 イ 米ソ冷戦と第三勢力 ウ 冷戦の終結と地球社会の到来 エ 国際対立と国際協調 オ 科学技術の発達と現代文明 カ これからの世界と日本</p>

(注) 表1, 表2は前掲(注)3の「21世紀に世界史をどう教えるか」佐藤英樹氏の論考より引用し, 加筆したものを。